『新しい階級闘争』紹介

写真はマイケル・リンド『新しい階級闘争』2022 年 12 月。まずは、施光恒「新自由主義的改革に反省を迫り、民主的多元主義の再生を促す書」と題した監訳者解説を抜粋して紹介したい。

本書は戦後実現した「民主的多元主義」の安定した政治が、1970 年代に始まった新自由主義に基づく「上からの革命」の影響を受け、機能不全に陥った結果、今日の米国では国民統合が揺らぎ、分断が深刻化していることを指摘し、また、その分断の解消をどのように図っていくべきかについて論じるものである。

各章の主な論点と筆者の主張を紹介していく。新しい階級闘争は、グローバル化推進策から利益を得る管理者（経営者）エリート層と、そこからほとんど利益を得ることのない庶民層（中間層ならびに労働者層）との間の対立である。（第 1 章）

この対立は、国内における地理的な分断も生んでいる。「ハブ」と呼ばれる大都市と、庶民層が多く暮らす「ハートランド」と称される郊外や地方という地理的分断も顕著となった。（第 2 章）

かつての階級闘争は、いわゆる資本家と労働者との闘争だった。古い階級闘争は、二度の世界大戦を経験する中で、国家を仲介役として解消に向かった。民主的多元主義の政治を通じて、労働者は資本家に対し拮抗力を持つことができた。（第 3 章）

上からの新自由主義革命が生じ、こうした暫定協定は長続きしなかった。管理者（経営者）エリート層の利益が経済、政治、文化の各領域でもっぱら推進される不公正な社会へと米国をはじめとする欧米社会は変質してしまった。（第 4 章）

それに対し、庶民層からの反発、「下からのポピュリストの反革命」が生じている。ポピュリスト運動は、エリート層による社会の寡頭制支配やそれに伴う国民の分断という「病理」から発する「症状」の一つだとみなす。（第 5 章）

エリート層は、庶民層のポピュリスト運動が発する警告を真剣に受け取ろうとしない。かつてのナチズムと同様、社会不適合者による非合理な運動だとみなす。（第 6 章）

現代社会の不公正さを認識するとしても、エリート層は「根治療法」ではなく、新自由主義の枠内におけるいわば「対症療法」をとろうとする。教育政策、ベーシックインカムなどの再分配政策、反独占政策といったものである。（第 7 章）

問題解決のためには、やはり庶民層の利益や見解を代弁し、政治に反映させる拮抗力が必要。労働組合など様々な中間団体を再生し、新しい民主的多元主義を現代においてつくり出さなければならない。（第 8 章）

そのためには、新自由主義に基づく現在のグローバル化推進策を改める必要性を訴える。資本の国際的移動や、外国人労働者や移民といった人の移動に対する各国政府の規制や管理を強化する必要があるいうのである。（第 9 章）

（2023 年 3 月 7 日）